

## ◆凶器はヨーヨー

自分の席に深く腰掛けた大島翔太は、文字通り頭を抱えていた。

(ああ、くそ、なんでこんなことに……)

ヘアワックスで尖らせた髪が崩れつつあったが、気にする余裕もなかった。頭の後ろで手を組んだかと思うと、今度はキーボードに突っ伏し、また、起き上がる。

そんなむなししい行動を繰り返しているシヨータの肩を、同じ部署の先輩が慰めるように叩いた。

「シヨータ、事故だったんだ。しょうがないさ」

「そうかもしれないっすけど……」

入社して4年目、ようやく自分の関わった企画が製品になったシヨータにとって、『ギガヨーヨー』の生産終了は受け入れがたいものだった。

「もしかしたら、在庫を改良して、北米かどこかの市場に投入するかもしれない。まあ、次の企画があるさ。今日も早く帰っていいぞ」

先輩の視線の先、パーテーションに掛けられた時計の針は、18時を過ぎたところだ。

シヨータが担当していた『ギガヨーヨー』は、様々なパーツでヨーヨーの見た目や重さをカスタマイズできる製品で、小学生を中心に一大ブームを巻き起こした。最近

は売上が低迷していたものの、生産を終了させるほどではなかった。そうなってしまったのはある事件がきっかけだった。

(つたく、中学生が……)

シヨータは背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。

(ヨーヨーのひもを長くして、教室の天井に当たった方が勝ち、なんて遊び、普通は思いつかぬーぞ?)

中学生が『ギガヨーヨー』を使って教室の照明を壊すという事件が起きた後、保護者たちがヨーヨーの危険性を学校に訴えた。蛍光灯には水銀が入っているから危ない、破片で怪我をしたらどうする、なんていうことをだ。

「中2にもなってヨーヨーでそんなことをする息子の危険性の方が問題だろう!」

とは言えなかった。『ギガヨーヨー』は、すぐに役員会議で製品回収が決定し、そのまま生産終了となってしまったのだ。

(中学校の蛍光灯も、ウチのオフィスマいに天井に埋まったらばよかったのにな)

次は一生遊んでもらえるような製品の開発をやりたい、シヨータはそう考えていた。(カードゲームとか? いや、もっと新しいモノを生み出して……)

そんな妄想をめぐらせていると、同期の女性社員の声のアタマに響いてきた。

「シヨータ！ 聞いてんの？ 八幡部長からお呼び出し。明朝、第3会議室」

「八幡部長!? 俺が？ なにそれ？ なんで？」

「さあ？ それじゃ、ちゃんと伝えたからね」

女性社員はそれだけ言い残して、どこかへ行ってしまった。

（『ギガヨーヨー』の件で懲罰人事ってヤツか？）

#### ◆新人の野望

新人研修最終日、グループワークのプレゼンテーションが終わり、定時を30分過ぎたところで全てのプログラムが終わった。

スーツ姿の新人たちが帰らないのは、これから配属部署の発表があるからだ。

やがて人事部の新人担当の女性が現れ、五十音順に名前を読み上げはじめた。

「森下さん、森下凜さん」

「はい」

「森下さんは企画部、新製品開発プロジェクトチームの配属です」

「わかりました。頑張ります」

（予定通りの企画部配属。わたしの勝ちね）

そう心の中で勝ち誇りながら、凜はこれまでの努力を振り返る。

（内定者懇親会での役員へのアピール、製品カテゴリーの暗記に、つまらない研修のグループワーク、同期との飲み会の幹事……思ったより簡単だったけど、ちょっと研修は頑張りすぎちゃったかもね）

「モリリン、スゴイね！ 企画部のプロジェクトって、きつと『トラフェア』だよ！ 夢、かなったねー！」

あだ名で呼び合うくらいに仲良くなった同期が、一緒に喜んでくれた。

（夢がかなったんじゃないかって、かなえたの）

モリリンこと森下凜は、妖精たちの人形と家具を集めるドールハウス『トランシルヴァニアアンフェアリー』、通称『トラフェア』を自分の手で作りたくて、ZAIN社に入社したのだ。

「私も企画部になったよ！ ゲーム課だって。モリリン、頑張ろうねー！」

「うん、頑張ろうね」

それでも同期の言葉は嬉しかった。ゲーム課に決まった彼女も『トラフェア』に関わりたと言っていた。

（企画部の配属は4人。でも、プロジェクトチームに入ったのは、わたしひとりだけ

みたい……もう彼女と競う必要もなくなったし、わたしの勝ちね)

新人全員に所属部署を伝えた後、人事の女性は凜のもとに歩み寄り、こう付け加えた。

「森下さんは荷物を持って、明朝9時に第3会議室に行ってください。詳しい組織の体制と業務内容はそこで聞いてください。」

「わかりました」